

ジンバブエの最近の政治について(小特集 最近のアフリカ政治の動き)

著者	石郷岡 建
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1988-03
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008723

ジンバブエの最近の政治について

石郷岡 建

南部アフリカのジンバブエの国内政治に大きな変化があらわれた。1980年の独立以来、対立反目を続けていた二つの黒人政党、ジンバブエ・アフリカ民族同盟(ZANU、ムガベ議長)とジンバブエ・アフリカ人民同盟(ZAPU、ヌコモ議長)が、合同統一して、一つの政党をつくることに合意。あわせてムガベ議長は、首相から大統領へと昇格。ムガベ新大統領のもと、一党制社会主義国家樹立へ向けて大きく踏み出したというのだ。

両党の合同は、1987年12月22日、ムガベ、ヌコモ両指導者が出席した記者会見の席上で明らかにされた。両党は「マルクス・レーニン主義の原則に導かれた社会主義国家の樹立を目指す」とし、また両党はできる限り早い機会にそれぞれ党大会を召集し、両党合同の協定を承認するとした。さらにジンバブエ西部・マタベレランドの「暴力行為」を終結させるため速やかに行動をとるとし、同地区一帯で広がっている反政府テロ活動に終止符をうつとしている。

ムガベ氏は、終始上機嫌で、「わが国は(この合意を)喜ばねばならない」「われわれはひとつになった」とコメントし、調印式の後、みずからヌコモ氏に近づき、両手を広げてとまどい気味のヌコモ氏の大柄な体を抱いた。長年にわたる怨念ともいえる両者の対立関係を知る者にとっては、考えられないような「驚きのシーン」の出現となった。

一方のヌコモ氏は、このムガベ氏とは対照的に、「歴史的な和解」とは言いながらも、喜びの表情は控え目で、「人々はこの(調印)文書を見て、誰が損をし得をしたのかなどと分析を始めるだろう。たがここに書かれていることは、両党の偽りのな

い心情であり、文章は不完全かもしれないが重要なことはこの書類の背景にある精神なのだ」と弁解気味の談話を出した。ヌコモ氏が必ずしも両手をあげてこの合意に調印したのではなく、またかなりの党支持者が不満や批判を持っていることを、はからずも披露することになった。

合同にむけての大きな障害とされていた新党の名称やそのシンボルについても、結局ムガベ氏のZANUの名前が残され、またシンボルも、朝陽に向かつて関の声をあげる雄鳥おんどりの姿がそのまま使われることになった。つまり二つの組織の平等な合体ではなく、ヌコモ氏のZAPUがムガベ氏のZANUに吸収されたことを強く印象づける結果になっている。

結局、「選挙で多数派となったのはわれわれだ」という原則論をふりかざすムガベ氏が、交渉の最後まで譲歩せず、追いつめられたヌコモ氏がとうとう頭を下げた、というのが真相に近いのかもしれない。ただヌコモ氏をはじめとするZAPU指導者たちは、それなりの論功行賞的な報賞を受け取っており、またヌコモ自身も「国賊」として後ろ指をさされることがなくなり、それなりの「敗者の哲学」を貫徹したように思われる。

ムガベ氏率いるZANUは、もとはといえば、ヌコモ氏のZAPUから分離独立した、いわば反乱グループが結成した組織である。ジンバブエの民族主義運動を指導してきたヌコモ氏の方針を生ぬるいとしたムガベ氏ら若手の反抗が原因だった。その後の経過は、ムガベ氏のZANUがしだいに表舞台に上り、ついには「分家」が「本家」の勢いを奪う形でジンバブエ政治を制したことになる。

ヌコモ氏にとっての「誤算」は、最初は路線対立から始まったムガベ氏らとの反目が、しだいに感情を交えた対立に変わり、さらにヌコモ氏とムガベ氏の出身部族の「ヌデベレ」と「ショナ」の民族・部族対立へと発展してしまっただけのことである。

1980年の独立直後から、ヌコモ氏のZAPUはヌデベレを代表し、ムガベ氏のZANUは、ショナを代表する政党という色あいが出はじめていたが、5年後の85年7月に行なわれた独立後の第1回総選挙では、投票方式が独立直前に行なわれた総選挙の中選挙区比例代表制から、小選挙区直接選出制へと変わったこともあり、血縁・地縁がストレートにあらわれる結果となった。選挙結果は、ムガベ氏のZANUがショナ人が多い中央部から東部で圧倒的に勝利。一方ヌコモ氏のZAPUは、ヌデベレ人の多い同国西部のマタベレランド地区一帯で地すべりの勝利した。全体としては、黒人議席80(当時)のうち、ZANUが64議席を占め、ZAPUはマタベレランドの15議席しかとれなかった。ほぼショナとヌデベレの人口比に等しい勢力比となっている。

ヌコモ氏はジンバブエの独立を目指しながら、国家指導者として尊敬されることを夢見ていただけに、自ら率いるZAPUが「国家・国民党」から「部族・地域政党」へと転落したことに対する失望は大きかったと推定される。さらに出身地を越えてZAPUを支持してきた党指導部の活動家たちのショックも大きかったとみられている。

今年70歳のヌコモ氏は、このままヌデベレ人の権益を守るだけの指導者として一生を終えるよりは、やはりジンバブエの民族主義を育て、指導してきた歴史的人物として、将来も語り伝えられるのを望んだことは想像に難くない。もはや中央政治では勝ち目のないZAPUをZANUに合同吸収させ、ヌデベレとショナの対立を解消するという崇

高な哲学・思想にかけるのが、政治家ヌコモ氏にとっても理にかなった判断だったといえる。

しかし、ZAPU指導部の考え方とは別に、ZAPUに票を投じたマタベレランドの人々や下部黨員は、ZANUへの不信感やショナ人への敵対感を捨てたわけではない。とくに独立後まもなく両勢力の対立から、マタベレランド各地で衝突騒ぎが頻発、ついには朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の軍事顧問に訓練された第5旅団(ショナ人を主体とした精鋭部隊)が出動、マタベレランド一帯で、少なくとも1500人以上の死者を出したといわれ、人々の間に忘れがたい過去として残っている。両党の合同がなされたとしても、現在のショナ中心主義のZANU政権に素直に従うとは考えられず、マタベレランド地区一帯の両組織の合同はスムーズに行くとは思えない。またたとえ人々が合同に従ったとしても、心から望んで入党するかどうか、疑問視されている。

我慢強さと妥協の政治家として知られるムガベ氏もZAPU内部の微妙な状況をよく理解しているようである。年明けの1月2日に発表された内閣大改造では、ヌコモ氏を含むZAPU関係者3人を閣僚に加え、ZAPUへの大幅譲歩の姿勢を印象づけようとした。政府系日刊紙『ヘラルド』は「驚き!」との見出しで、ZAPUへの譲歩に驚嘆を示した。ムガベ氏は、ヌコモ氏らに論功行賞を行なうとともに、ヌコモ氏の背景にいるマタベレランドの人々に、和解のアピールを強く行なったことになる。

今回の合同の動きのなかでもう一つ見逃せないのが、ムガベ氏のZANU内部における政治権力掌握である。実はヌコモ氏のZAPUが、ジンバブエ政界の表舞台から引き下がるにつれ、ZANU党内部の主導権争いが過熱化する勢いにあった。党内部の主導権争いは、外部にはなかなかうかがい知れないものであるが、ムガベ氏を中心とする同国中

中央部の「ゼズール」、東部の「マニカ」、南部の「カラंगा」(もしくは「マシゴ」)の三つのグループが大きな派閥を形成し、地縁・血縁色の強い対立を展開してきたといわれる。

昨年春、ムガベ氏とヌコモ氏の政治交渉が暗礁に集りあげた際に、ショナ人の中で最大のグループである「カラंगा」が、ヌコモの「ヌデベレ」と組み、単純計算で過半数を制し、ムガベ派を追放、ジンバブエ政界を牛耳るといふまことしやかなうわさが流れた。またジンバブエ国鉄の土地売却にからむ不正事件を追及された、「ゼズール」出身で、ムガベ氏の子飼いとみられていたウシオクンゼ運輸相は、「これ(事件追及の動き)は(カラंगाの)陰謀だ、部族対立をおおる者がいる。チテポ(ジンバブエ独立運動の英雄)を殺ったのも彼らだ」との発言を行ない、大騒ぎになったことがある。

年明けに発表された内閣改造では、ヌコモ氏らZAPU関係者を優遇する一方、ZANU党内反主流派を明らかに冷遇しており、とくに「カラंगा」グループのリーダーと目されていたズボブゴ司法・憲法相を、ウシオクンゼ氏とともに、無任所相(ZANU・ZAPU両党合同問題担当)に落とし、政府の政策決定機関から遠ざけた形となった。ズボブゴ氏は「マニカ」のリーダーとして権勢をふるったあと失脚への道を歩んだテケレ氏(元マニカ地区党支部長)と同じ道をたどるのではないかと噂されている。

内閣改造発表の際にムガベ氏が、その存在を明らかにしたインナーキャビネット(上級閣僚)のメンバーは、ムガベ大統領、ムゼンダ副大統領、ヌコモ無任所相(農村開発)、ニャグンボ無任所相(政治担当)、チゼロ蔵相(経済担当)の5人であり、これに「ゼズール」出身でムガベ氏の側近中の側近といわれるシャムヤリラ外相(前情報相)、マハチ内相(前農相)、ヌカラ国防相(前内相)らが政策決

定のキーを握るとみられている。ムガベ新大統領が発表した政府上層部は、ムガベ氏への権力集中を示しており、さらに意外に穏健かつ実務能力のある政策実力者が、ムガベ氏の脇を固めていることになる。「過激な反南アフリカ政策」「社会主義路線」「一党独裁制」など、ムガベ政治へのレッテルは多いが、閣僚の顔ぶれは、ムガベ政権がしばらく穏健路線をいくことを強く示唆している。

ただし、ムガベ氏自身がジンバブエの将来をどのように考えているかになると話は別である。アフリカ大陸各地で見られたように、独立当時は過激な社会主義者だが、歳月を経るにつれて穏健親西欧路線の信奉者へと変身していくパターンを、同氏もたどるとは限らないようだ。ジンバブエの進路は、ZANUの頂点に立ち、絶大な権力を持つムガベ大統領の考え方しだいといって過言ではない。またその考え方は、ムガベ氏をどうとらえるかという人物・性格論に大きく支配される。

ムガベ氏は、カトリック系ミッションスクールから平等・公平の精神を徹底的に叩き込まれ、ピューリタンのともいえる思想追及型の生き方を学んだ。さらに幼少時代に味わった人種差別への憎しみ、憤りをてことして、理想社会の樹立を目指している。ムガベ氏の社会主義指向は、国内にあふれた不平等・不公平への是正に対する熱い思いのあらわれで、その熱情はいまも変わっていないと思われる。ただムガベ氏が、他のアフリカ指導者と比べて抜きんでいるのは、そのしんぼう強さと現実主義的と評される物ごとへの冷静な対処である。「内は熱く、外は冷静、時には冷血でさえある」といわれる由縁だ。さらに、ムガベ氏はひとり息子を死なせており、サリー夫人はガーナ出身。血のつながりを持つ親族へのしがらみがなく、財産・富を残す必要もない。思想追及型になりやすい政治家といえる。

ムガベ氏は物ごとの処理を急がないが、いったんこれと決めたことは執念深く実現に向かって歩を進めていく。独立以後7年間にわたり、一步一步自からの政治基盤を固め、政敵を少しずつ遠ざけてきた（最大のライバルであったヌコモ氏さえも、ついには頭を下げさせた）。また白人議席撤廃や憲法改正への執念は「そんなことできるか」という一般の声を聞き流しながら少しずつ実現しており、あとからふりかえるとムガベ首相の政治公約は、かなり高い率で実現されつつある。

ムガベ氏の公約の最大のものは土地改革および生活水準向上、つまり「みんなが平等に豊かになる」とする社会主義国家の実現だが、この公約は恐らく今世紀中には実現されないだろうし、また実現も目指してはいないのではないか。独立戦争の最大の目標だった白人農場主からの土地奪還という目標は、独立後は遅々として進んでおらず、それどころか生産性の高い大規模白人農場に優遇策さえとっている。白人社会とくに白人農場主たちのムガベ氏への信頼は予想以上に大きい。昨年秋に実施された白人議席廃止のあとの空白議席の任命や年明けに行なわれた内閣改造でも、ムガベ氏は再び白人に優遇策をとるなど、白人社会を人口比以上に重視していることを内外に示した。

ジンバブエ経済のかじ取り役をつとめているチゼロ蔵相は「数パーセントの人々が富を牛耳る国では、国家が経済に介入する社会主義体制を目指すのは避けられない」と述べ、ついでに「確かに中国やソ連では、社会主義経済の見直しを始めている。だから社会主義とはいってもどうなるか、その時になってみなければわからないさ」と語ったものである。ムガベ政権上層部の社会主義のとらえ方は、不平等・不公平の是正に優先順位が与えられており、中央集権的計画経済を高く買っているというわけではない。

現在ムガベ氏が一番頭を悩ませ考えているのは、実は社会主義体制樹立というような問題ではなく、隣国南アフリカの白人体制の行方かも知れない。ムガベ氏は南アフリカの人種差別を人一倍許せないと思っていることは疑いががないが、それ以上に、もし南アフリカの白人政権が狂暴化したり、南アフリカ国内の人種対立が激化すれば、その被害は、まともにジンバブエにふりかかる。そして、ムガベ氏はそのような事態が、近い将来やってくる可能性が強いとみている。

一昨年5月、南アフリカの政治解決を求め仲介工作を行っていた英連邦賢人グループの交渉が、もう一步というところまでいきながら、南アフリカ政府軍のジンバブエ、ザンビア、ボツワナへの越境攻撃でつぶれたことがあった。その攻撃を受けた日、記者会見にあらわれたムガベ首相（当時）は「一体、私に何を言うことができよう」と沈痛な表情で記者団に答え、ジンバブエのひ弱さ、無力さを認めたあと、「必要ならばサツザ（ジンバブエの主食メイズ）を肉なしで喰え」と、うなるような声で国民にアピールした。いわば臥薪嘗胆を誓ったともいえるアピールだが、意外に本音に近い心情吐露だったと思われる。

ムガベ氏にとっては、ヌコモ氏のZAPUとの合同やZANU内部の対立など、とるに足らない問題かもしれない。それよりも軍事的には劣勢で、しかもこぶしを振りあげたものの実施できなかった対南アフリカ経済制裁など、涙をのんだ悔しさの方が重要だったのかも知れない。誇り高いムガベ氏が何を考えているか。全てはきたるべき南部アフリカの騒乱、白人国家南アフリカとの対決に備える前哨戦、準備であるかも知れないのだ。

（いしごおか・けん／毎日新聞外信部）